# 鹿高野球部だより *No.17*

## ◎思いが届く◎

鹿島小学校の皆さんから頂いた感謝メッセージ(中央)
とそれを眺める野球部員(左下)

12月21日(金)、かしま放課後児童クラブで、今年度4回目となる野球教室を行いました。またその後日、鹿島小学校の野球教室に参加してくれた子どもたちから感謝のメッセージカードが届き、現在室内練習場にて掲示をしています。

私たちの活動が、子どもたちに良い影響を与えている。そのことを私たちに身を持って体感させてくれる機会は、そう簡単にホイホイと訪れるものでもありません。だからこそ、届いた思いは何よりも確信的な事実であり、何よりも強く私たちの力となっています。

そして春や夏、子どもたちは野球を「教える」姿ではなく、野球で「勝負をする」私たちの姿を目にします。私たちは、その時子どもたちが描くであろう「憧れのお兄さん・お姉さん」に挑戦していかなくてはなりません。

私たちと、これからの「野球」の未来のために。

## ◎王者◎

『王者』。すなわち、物事における王座に立つ人。簡単に言えば一位だとか優勝だとかいう成績を持っている人のこと。さて、その『王者』になるために必要な要素はなんだと思いますか。

今月4日に開幕した北京オリンピック。世界の強者たちが揃い、更にその上に立つ『王者』を決めるこの大会には、『王者』の要素が至るところに転がっていました。

ーー羽生結弦選手をご存知でしょうか。彼は、日本のみならず世界のフィギュアスケートを長く牽引し続けている、トップスケーターです。2014年のソチオリンピック、2018年の平昌オリンピックでは、男子史上66年ぶりとなる五輪2連覇を達成しました。66年という数字で、2連覇の偉大さは誰もによく感じられます。そして、言ってしまえば3連覇を賭けた今回の北京五輪でした。

結果は、ショートプログラムを8位でスタートし、その後表彰台に近づくが惜しくも4位入賞。2位3位に日本人選手が連なる表彰台に、羽生選手はあと一歩で乗ることが出来ませんでした。しかし、彼の得点を大きく上回る圧倒的演技を見せ優勝したアメリカのネイサン・チェン選手は羽生選手に対し「彼はこの競技を進化させているんだ。特別なスケーターなんだ。」と、彼をこれでもかと称賛しています。

誰もが認める、羽生選手がもつ『王者』の風格。その理由は、彼がいつまでも挑戦者であることに色濃く現れています。3連覇という、非常に名誉な経験と称号をかけた北京オリンピック。羽生選手は、フリープログラムに、全人類の誰も成し遂げたことのない大技「クアド.アクセル(4回転半)」を組み込みました。世界一の舞台で、です。冷静に考えてみてください。そんなに危ない橋を、わざわざ渡ろうと思いますか。2連覇という堂々たる成績を持ってして、世界を相手に、彼は大きなリスクを孕んだ「挑戦」に踏み込んだのです。結果は失敗に終わってしまいましたが、その裏では、公式戦で初めて「クアド・アクセル」という技自体が技として認定されるという、フィギュアスケート界の革命が起こっていました。いつまでも進化を続けられる人は、いつまでも挑戦し続けている人です。いつまでも問いを抱え、答えを出し続けている人です。羽生結弦選手は、一つそのいい例として紹介させていただきました。

何をするにも必要なのは『基礎』で、それはもちろん安定的であればあるほど良い。安定して良いものはいつまでも安定的に保ちたいし、できれば変化して失敗するといったようなことはないほうが良い。

正直、誰もが不変を望む心を持っていることと思います。しかし、それを仕方がないと言ってしまえばそれまでなのです。「変わらないほうが良いから自分はここから一歩も動かない」。こんなことになってしまえばなおのこと、良くないことなのは一目瞭然でしょう。『不易流行』という言葉があるように、変えずに大切にしていくべきものがあるならば、それ以上に進化も必要。人間的にも、野球的にも成長の鍵はここにあるのではないでしょうか。

常に自分の中に問いを立て、答えを出し、改善する。自分と戦い、挑戦し続けていくことを大切にしていってほしいと思います。